

シリーズ「50年後の国土への戦略」

## 建設業界の将来に向けての議論を始めよう



高野 伸栄  
論説委員  
北海道大学  
公共政策学連携研究部 准教授

12月に入って、大学3年生の就職活動が解禁となり、修士1年を含めて学生達は就職戦線で格闘している。今年は景気の回復傾向を受けて、全般的な状況は改善しているようである。しかし、学生が希望する企業と募集側のミスマッチはむしろ拡大しつつあるよう思える。

今の大学3年生の多くは1992年(平成4年)生まれである。1992年の前年にバブル崩壊が起こっているから、彼らはまさに「失われた20年」にこれまでの人生を過ごしてきたことになる。一方、生活スタイルについて考えると、1998年には多くのポケベル利用者がPHSにシフトしたとされ、翌99年には携帯電話のiモードやEZWebサービスが開始されている。物心が付いたときにはPHSや携帯電話が当たり前となっていたのである。テレビは液晶に、インターネットがブロードバンドに、携帯がスマホに変わっているものの、基本的なデバイスとしては大きく変化していない。

一方、1960年代に生まれた筆者は小さい時に、冷蔵庫や洗濯機が家に初めて来たときの喜びを今でも覚えているし、音や映像を個人で記録に残せるテープレコーダーやビデオ、電卓、パソコンなどそれまでは体験したことのないものの購入にワクワクしたものである。さらに、生まれてから、オイルショックまでは高度経済成長期であったから、給料も技術も生活レベルも全てが右肩上がりになることを疑うことなく、暮らしてきた。多くの人は努力すれば「将来は今より良くなる」という意識を漠然とではあるが持ち続けてきたのではないだろうか。

これに対し、失われた20年に暮らしてきた今の学生は、給料が下がること、一流企業も倒産すること、一生懸命働いてもリストラにあってしまうことを見聞きし、技術革新のワクワク感も少ない中で成長してきた。また、地球温暖化、超高齢化社会、財政の逼迫など多種多様な不安要素も多く、「大いなる将来への漠然とした不安」を持っている。そのような学生が、現在の生活に満足を感じているとすれば、なにより「今の生活と時間」を確保することが第一目標となるのはごく自然なことであろう。当世学生の自治体志向の強さはこの表れではないか。

建設業界について考えてみよう。現状は東日本大震災の復興やアベノミクスの影響で、公共事業の増加傾向に対し、人や物の不足が課題となっている。しかし、この状況が10年続くのかどうかというと、不安な思いがよぎり、社員や設備を増強することにためらわざるを得ないという多くの声を聞く。経営者が将来のビジョンを描ききれないのが建設業界の現実なのではないか。ビジョンを描ききれない業界に将来への石橋を叩いて渡ろうとする当世学生が好き好んで入っていくとは考えられない。将来を想定できそうな会社には人は集まるが、それ以外の会社に学生は集まらない。これが学生と企業のミスマッチの原因と考えられる。

多くの不確定要素のため、将来のビジョンを描ききれないのが現実だとしても、小手先だけの修正だけでは根本的な解決にはつながらない。将来に向けての技能工、技術者不足は待たなしでやってくる。関係するすべての人々がそれぞれの立場でこの業界を将来どのようにすべきかの議論を重ね、その方向を示し、それを実現するための方策を立て、実行に向かわなければならない。学会では100周年事業として、土木学会将来ビジョン(仮称)を策定中であると聞く。また、建設マネジメント委員会では小澤一雅委員長の発案により将来ビジョン特別小委員会を設置、建設マネジメント委員会各委員からの30代までの推薦者をメンバーとしている。本特別小委員会では、彼らが責任をもって退職までに成すべきことをビジョンとしてとりまとめることとしている。現在おおよそ月に一度のペースで議論を行っており、本年度中に結論を出す予定である。皆このような議論を行うのは初めてとのことで、様々な思いが飛び交い、生き生きとして、とても楽しみに議論を行っていることに驚かされる。とりまとめは参加者全体での議論をまとめたビジョンだけでなく、将来への各人の思いを何らかの形で残すようにしたいと考えている。これらの取組みが建設業界全体の若者の将来への議論のきっかけとなることが大きな希望である。

建設業は、災害への備えやインフラの老朽化対策等、社会から今まで以上に大きな期待が寄せられている。しかし、多くの構造的な問題や不確定要素の存在により、将来へ向けたビジョンを描ききれず、若者を迎え入れられない状況にある。これらの解決は一朝一夕でなされるものでないことはいままでもない。しかし、これに何としても立ち向かっていかなければならない。関係するすべての人々がそれぞれの場で、将来のあるべき姿についての思いを表し、互いにぶつけ合うことが、その第一歩であると考えられる。